

第十八章 明治の終焉

一 ロンドンの取引先七十軒

明治は四十五年を迎う。思えば長くつづいたもので、まさに史上の超記録である。これまでは足利義満から三代の將軍にわたってつづいた応永の三十四年が最も長い。大化の年号がつけられてから明治まで、つけられた年号の数は二四五で、だいたい一つの年号の寿命は五年平均だから、明治はその九倍の年月を経過したが、ついにこの年が最後の年となる。しかし元旦は例年とかわることなく、中村日記によると、次の如き記事になっている。

「一月一日 午前九時出社樓上ニ於テ社員一同ト新年祝賀式举行了テ隣空地ニ於テ一同撮影十一時散会」
翌月にはいつて次のような記事がある。

「二月二十一日 松下領三ヨリロンドン二月三日付ニテロンドン取引先約七十軒訪問是ヨリ少シクロンドン商業振研究致度滞在期間延長ノ承認ヲ乞フ旨申シ来ル」

去年十月、丸善の第一回ヨーロッパ派遣員として出発した松下の動静で、これによると明治の末年ロンドンだけで丸善の取引店が七十軒におよんでいた盛況におどろかされる。

丸善は、見習生に外国語を修得させねばならぬ必要上、夜学を授けていることは、前にのべたが、店の発展とと



小柳津社長	金沢夜学会々長	前田講師	中島講師	白尾講師
山崎支配人	鳥居四郎	須永佐三郎	藤江覚太郎	斎藤支配人
井上清太郎	山本貞雄	木下保太郎	川上秀作	渡辺卯太郎
				宮城英一
				寺井俊夫
				山田政治
				三浦理事
				中村支配人

丸善夜学会第一回卒業式記念写真

もに新入の少年の数もふえてきて、それを教育する機関はいきおい学校の体裁が自然にととのつてきて、四月二日の中村日記に左の記事がある。

「午後七時ヨリ会社楼上ニ於テ夜学会第一期卒業証書授与式ヲ行フ其順序

君ケ代合唱ニテ開会幹事ノ事業報告会長ノ訓辞卒業生総代答辞生徒総代送辞アリ優等卒業生須永寺井山本渡辺四名ニハ万年筆賞与其他優等生ニハ手帳ヲ賞与シ後小柳津老人祝辞内田及広井（来賓）ノ訓辞アリ了テ一同ニ茶菓ヲ餐シ十時半散会

五月七日 会社夜学会卒業生ノ為役員教師一同中島待乳二方ニ至リ夜間撮影ヲ為セリ。」

二 日本に読書界ありや

「学鑑」の明治四十五年第一号は魯庵生の「公開書一則」を巻頭にのせている。

大阪毎日新聞の角田浩々歌客が「読書界の新傾向」という質問を發してきたのに対する反語的返答で、十頁にわたり長文で優に評論の体を得ている。

それによると、日本に果して読書界なるものがあるか。なるほど内務省の調査によると、出版数の多いことでは文明国として恥ずかしからぬが、その内容には「間がいい節」「剣舞」絵草紙、赤本まで算入されていて、現に東京には書籍店より出版者の方が多いのだから、いかに実態のあやしげなものが多いかがわかるが、そんな所の出版を内務省の統計は、天下の大著述と十把ひとからげにしているのだ。

近ごろ東京朝日新聞に古宇田という学士がえらんだ代表的な現代家屋の図面が連載せられたが、たいてい書斎を欠き、たまたま、客間兼書斎、書生部屋兼書斎をもうけたのが若干あったが、この兼帯書斎たるや云いあわせたように四畳半にあらざれば六畳である。独立に八畳という書斎をとった図面はひとつしかなかった。これで大体その読書程度の察しがつく。

と云ってそれから魯庵特有の諷刺、嘲罵、笑殺、愚弄の語が応接にいとまなきほど相つぎ、文士の不勉強をあげて、平生から読書につとめて倦まざる者は鷗外、逍遙、露伴、柳村その他数士にとどまるといつている。(この中に花袋、天溪、千葉掬香、千葉亀雄などが入ること、彼の平生の談話から推察できる。)

いまの若い連中は、近松も西鶴も元本ではよめず、それなら西洋文学はよんでいるか――

「丸善の販売部数をしらべてもわかるが、モウパッサンの『女の一生』の如きは格別として百部以上うれた文学書は数えるほどしかない。アナトール・フランスの如き、各文学雑誌でしばしば紹介せられたにかかわらず、その最も評判の高い『ジルヴェスター・ボナール』でさえが二十冊ぐらいなもの、中には三、四冊しか売れなかったものもある。イブセンの如き二十年前から日本にきておるが、平たくいうと文壇の名士でさえがその作を何冊よんでおるだろう。盛んにイブセンを論ずる人の中で僅に二、三冊しかよまない人があるかも知れぬ。ニーチェとか、ハウプトマンとか、ツルゲーネフとかいう名は中学生でも知っておる。『文章世界』の投書家だって批評しているが、真実よんでいる人が、どれほどあるか疑問である」

買ってゆく人を店内にいて見はっている目で、こうあばくのだから、呼び声はにぎやかなようであっても、これ

が丸善店頭で消化された近代文学の実相であつたろう。しかし魯庵は自分のしたしく見知っている読書家の名を羅列する。

「赤堀又次郎氏の如き万卷を読破してなおますます涉獵して飽かざる篤学者、鷗外博士の如く文芸學術百科にわたりて一冊も洩らさじとする精力ある博覧家、あるいは徳富蘇峰氏の如き該博なる涉獵家、故平子鐸嶺の如き精透なる読書家、あるいは東西古今の圖書を蒐集して細大えらばざる狩野博士の如き、医学を中心として内外古今の圖書数万巻を集めて古板に精通すると同時に最新研究の討尋をも少しも怠らざる富士川ドクトルの如き、その他井上（哲次郎）博士、戸水（寛人）博士、松村（任三）博士、坪井（正五郎）博士、幸田（露伴）博士、坪内（逍遙）博士、上田敏博士等いづれも敬重すべき読書家である」

この外に魯庵と交友のあつた夏目漱石、また丸善に舶載さるる經濟書という經濟書は片っぱしから買いこんで、且つ読んだ福田徳三博士などを加えたら、丸善の店裏からのぞいた読書家は尽きているであろう。その他の連中ときたら、書籍を学校道具あるいは立身出世の方便と心得、あるいは碁将棋盆栽より面白くない道楽と心得、文学などはベースボールと同じく、学生のたのしむ物だと心得ているのだと、ますます出でて、ますます口がわるい。自然主義諸作家の小説全部の印刷部数をあわせても、村井弦斎の「食道楽」一部の発行高にも及ばぬといひ、こんな一般世間に、読書界の傾向を説いたって馬の耳に念仏だと結論してはばからぬ。

明治の最終号（七月号）の「学鑑」がのせた Monthly Bulletin の項目書とその下に抱括されている書冊数をかかげておこう。さきに上げた明治四十一年の分と対比すると、わずかに二、三年の間に、面目のちがった部分があ

る。

飛行器及自動車 一種 農藝園芸林学及家畜 四種 娛樂及遊戲 三種 人類学及人種学付古俗学 一種
建築及造営学 六種 星学 二種 書籍学 一種 伝記及書簡集 四種 化学工芸及製造 十
種 化学 十一種 商業及商業経済学 十一種 辞典 九種 家政学 一種 教育 四種 電気
磁気及応用電気学 八種 土木工学 二十種 材料及材料強弱論 一種 機械工学 三種 美術 九
種 地理学、旅行及案内記 九種 地質学 三種 史学 五種 日本及支那 三種 語学 一種
法律 四種 文学 十種 数学 十種 医学及衛生学 六種 採鉱及冶金学 五種 音楽 八種
博物学 九種 軍事及海事 二種 哲学 二十種 物理学 六種 詩及戯曲 二十一種 政治学
八種 小説 十五種 社会学及経済学 四種 神学及宗教 十一種 等約二百数十種
この中には一種目一冊が大部分だが、シュテッヘルのシラー註釈書の如きは、一種目で四冊の戯曲をふくんでい
るような例がある。法律の部にもそのような例があるから、冊数にしたら、もっと多い。二、三年前と一番のちが
いは、一ばん初めに「飛行器及自動車 (Aëroplanes, Airships and Motorcar)」がきて、元の Agriculture に先
んじていることで、農業時代から機械時代に飛躍している。この号では、この種目は一冊の書名しか上っていない
が、先月の六月号には、これが六種目あがっている。それからこの号には日本及支那は三種目しかあがっていない
が、正月号をみると四十種目あがっている。

それからこの年四月から、ロシヤ原文の小説が輸入されて、このパレットインにのりはじめ、ドストエフスキと

ゴリキイがその先頭をきっている。おそらく今までとても、輸入されていたのにはちがいないが、このバレッティンには主として英独仏の書名がならび、ロシア語の書物が登場したのは珍しい。間もなく誰れかが買ったと見え、この七月号にはロシア語の書名はいっさい影を消している。しかし哲学の部に Croce の *Estetica* の名が見える。大正五、六年ごろから、早稲田でこの「美学」の英訳を教科書につかい始め、さらに数年後には菊池寛が批評家スビンガンの紹介で知って、里見弴との論争に引き合いに出しているこの「美学」が、イタリア原語では明治末に入っていたのだ。やっぱりそんな書物に目をつける人があったと見える。

それ以外に、来月中旬に着すべき新著 *New Books expected to arrive in August* とつづ、二百種目を十一頁をついやしてのせている。

三 ネルソン百科全書

「学鑑」第二号の雑報に「斎藤秀三郎氏のネルソン批評」という記事があるのは、興味がふかい。斎藤は当時正則英語学校の校長で、英語界の耆宿であり、その科学的な文法の研究ぶりは、後に日本にも聞えてきたイエスベルセンと比較せられる。

彼はプリンクリーと共力で「世界英語読本」を編纂し、その材料をさがして、つくづくと歎じたのは、正しい姿勢の英語のないことである。純粋の英国人は英国人一流の英語となつて、程度の差はあるが、カーライルの著作を難解ならしめているような癖がある。それは日本でも東京人の癖、大阪人の癖がそれぞれにあって、模範的な国語

の粹はなかなか見つからない。彼は努力して、英語の真髄を得た文章を英国人および米国人の著作中に物色して、ついに発見することが出来なかった……云々。

これはなるべく早く、表現上でイギリス人的特癖もしくは体臭を自分のものにせよと説きかせる世の英語学者の言葉とは真反対である。そういえば正則英語学校発行の教科書はゴールド・スミスでも、フランクリンでも、ところどころ斎藤が訂正しているのが思出される。

彼はその談話でつづけていう。

「この点からみれば、コーナン・ドイルの筆から綿々とつづく英語は、比較的その癖のないもので、国定読本その他の小説雑誌の類は、その内容をよむものとしてはともかくも、英語の真髄たることはできない」

この人がドイルの文をはめるのは、わかるような気がする。その次に彼はまことに意外なことを云っているのだ。

「大英^{ブリタニカ}百科辞典も亦然りであるが、百科辞典はすべからず、この英語の真髄をもつて、努めて癖のないものでなければならぬ。が未だ完全なものがない。がこれらの欠点は比較的徐々にその跡をたちつつあるようであるが、このごろ出版のネルソン百科辞典は、これら諸方面より究めてくると、英国人の手にかかったものの中では、最



コナン・ドイル

も完全なものである。英語を学ぶもの又英語をかくものの模範であるというを妨げぬ。」

しかしここで彼は一転語して「誤解しては困るよ。我輩は丸善から推挙料を貰ったわけではない」と諧謔してセンチュリイやスタンダード辞典に言及し、ネルソンは手輕でこの種随一のものと呼称し、

「日一日として、その活動の舞台をひろげつつある日本国々民は世界的知識をあらゆる方面から求める必要がある。……国語に伴うて出来事はおこらぬが、出来事にともなうて新らしく来るものは国語である。である以上は、日々英語で書かれた新聞雑誌という最捷徑から世界的知識をもとめてゆくためには、この百科辞典に参照して、世界的の事実を知らねばなるまい。その出来事にともなうてくる新辞句了解上からみても必要である」

まるで、折からやっぱり売り出しに狂奔しているネルソン百科辞典のあつらえ向きの談話であるが、中央新聞記者が会見してのせた訪問記事を転載したので、丸善が直接関係した記事ではない。昨年は幸徳秋水大逆の爆弾製造に参考として披見され、ここでは英学界最高の大家から、この思わぬ賞讃を博す。ネルソン百科辞典の運命も亦奇である。

四 明治天皇崩御

梅雨がやっと、きれいに晴れあがったと思われる七月二十日、天皇（明治）御不例の号外が出て、満都をシヨックした。中村日記をみよう。

「七月三十日 午前零時四十三分 聖上陛下崩御アラセラレタル旨發布セラル依テ本日ハ弔旗ヲ掲ケ臨時休業
両支店へ休業スヘク通知ス

七月三十一日 本日ヨリ五日間廢朝ノ旨仰セ出サレタルニヨリ会社ハ八月四日迄臨時休業スルコトニ決シ
告セリ支店へ右通知ヲ為セリ但棚卸ハ此間ニ於テ例ノ通り執行スルコトニセリ」

八月一日をもって新しい年号は大正と公布せられた。「天正」という年号のあったところから、歴史が何百年前に逆転したような気がするという感想をもらしたものがあつたのは、明治人の感傷というべきであろう。

明治の年号は周易に「聖人南面而聴_ニ天下_一 嚮_レ明而治。」とあり、孔子家語に「長聡明治_ニ五氣_一 設_ニ五量_一



明治天皇

撫_ニ万民_一 度_ニ四方_一」とあるのより出で、意味として申し分のない年号であり、又この治世によく適合して動かぬものがあるから、追慕の情ふかきは当然である。しかし元は嫌われて、江戸時代、管家から変る年号の候補として撰択にのぼつたと数度なのに、難陳（是非の論議）において、由来「明」の字のつく年号は不祥事がおこって、長くつづかぬとの反対が出て、たとえば明暦には空前の大火があり、明和は九年を迎えようとし、迷

惑（明和九）に通ずるとして改易になっている。また明治は日月に加うるに台は星の名で、つまり日月星が水におぼるの字相だから、洪水のおこる恐れがあるという理由で退けられたこともある。

しかし維新改易の際には、岩倉具視の英断で難陳を廢し、菅家のえらんだ候補の数種の年号を、神前において天皇みずから籤引きせられて、「明治」があたり、迷信を避けて、これにきめたところ不祥どころか、年号として最長期のレコードをつくった。

明治は一天子のもとに、今までの最長期年号の応永の三十四年をしのぐこと十一年の長期をつづけ、そのあいだ台湾征伐、西南戦争、日清戦争、北清事変、日露戦争の五つの大小戦争を経験し、そのたびに国力の発展をかさねて、ついに世界の一等国に伍するに至った。共産党はその主義から、アメリカはその統治政略から、明治の諸戦争に侵略戦争の名を冠し、その説をとる学者評論家も少くない。もとより春秋に義戦なしたが、しかし明治時代においては自衛の意味の方が意識的に大きく、侵略的な面がよしあっても、止むを得ざる程度である。

丸善は明治二年一月一日を創立記念日とし、じっさいには明治元年十一月から、その仕事をはじめているので、明治と共にあゆみ、明治と共に行路難を経験し、明治とともに発展した徹頭徹尾の明治ッ子商店で、三井、住友、鹿島建設などの如き古い歴史を有せず、日立やソニーの如く新しくもない。

明治に眷念たるは、おのずからその所以があること、次の事実からも明瞭に推測できるであろう。

すなわち、日清戦争で丸善は大飛躍をとげたと云っても、極めて小規模なもので、また純益金について見ても明治三十六年、三十七年には未だ三万五千円乃至三万七千円にとどまり、日露戦争が第二年目の明治三十八年にはい

ると、五万七千八百余円、戦勝第一年の三十九年には八万八千五百余円、四十年には更に十万一千一百余円の純益金を挙げ、株主配当も三十八年には三十六年、三十七年の一割から一躍して三割五分に達し、更に翌三十九年には四割三分三厘に及んだ。以て社業の躍進振を察知することが出来よう。而して四十年には資本金二十万円の全額払込を完了したので、更に一段の活躍をなすために、四十一年十月十一日臨時株主総会を開いて、資本金を更に三十万円増加して総資本金五十万円となすことを決議し、新株式の割当を決定し、同時に定款中資本金規定に関する条項の改正を決議した。

なお明治四十五年一月二十四日の株主総会に於て定款の營業種目中に、圖書の出版の一項目を特に追加し、資本金五十万円の三万円をその圖書出版費に使用することを定めた。従来も圖書の出版は行っていたのであるが、ここに至って圖書の出版を相当重要視するに至ったことが窺われる。

五 補 遺

丸善は洋書の輸入を表看板とする商社なので、この百年史にも邦文圖書の出版は、多く閑却してきたが、この日露戦争前後からの出版で、先ず最も大部なものに「明治財政史」十五冊の予約出版があったことは明治三十六年の項に既述のとおりである。日露戦争の前後には敵国研究の必要に伴いロシア語の字典の需要が多くなった。そのため明治三十六年九月「増訂露和字彙」を、ついで三十七年三月二橋謙の「日露字典」を出版した。前者の原本は文部省編輯局の蔵版にかかるもので、明治二十年に発行され、その後絶版となって市価は非常に昂騰し、容易に手に

入れることが困難となっていたので、丸善では研究者の便宜のために文部省の許諾を得て、外国語学校の教授で、斯界の長老の古川常一郎に依頼して旧版の不備を増訂して出版したのである。満洲及支那大陸に関する研究もこの頃より大いに高まり、この方面の書籍としては

編著者	書名	出版年次
遼東兵站監部編纂	滿洲要覽	(明三八)
東亜同文会編纂	樺太及北沿海洲	(明三八)
歩兵中佐守田利遠	滿洲地誌四冊	(明三九)
根岸 信	清国商業總覽五冊	(明三九)
東亜同文会編纂	支那經濟全書十二冊	(明四〇—四一)
歩兵大尉山 泉初男	西藏通覽	(明四〇)

等がある。その他のものに就て見るに地理に関しては

編著者	書名	出版年次
東京高師教授矢津昌永	歐羅巴洲	(明三六)
	韓 国 地 理	(明三七)
	清 国 地 誌	(明三八)
	露領亜細亜、西亜細亜、中央 亜細亜、其他	(明三九)

等がある。

植物学に関しては

慶大教授 永田健助

阿弗利加洲
南亞米利加洲
新撰商業地誌二冊

(明三六)
(明四一)
(明四一)

編著者	書名	出版年次
東京帝大教授理博 松村任三	新撰植物図鑑 二十四冊	(明四四—大正一〇)
東京帝大教授理博 三好 学	帝國植物名鑑 三冊	(明三七)
理博 早田文藏	日本植物景觀 十五集	(明三八—大正三)
東京帝大植物学教室編纂	日本之植物界	(明四三)
	英文富士植物帶論	(明四四)
	大日本植物志 第一卷第一集	(明三三)より

等がある。

次に理化学工業方面に就て見るに、その数量は極めて多く枚挙の煩に堪えないので、その中より重なるものを挙げて見れば

編著者	書名	出版年次
東京帝大教授工博 田中不二	応用力学第一編 蒸気タービン 蒸気機関	(大 二) (明 四一) (明 四一)
東京帝大教授工博 内丸最一郎	瓦斯及石油機関二冊 機械設計及製図二冊	(明 四二) (明 四二)
東京帝大教授工博 内丸不二郎 柴田畦作	工業力学 機械学三冊	(明 三九) (明 四三)
東北帝大教授工博 宮城音五郎	機械測量学	(大 元) (明 四二)
九州帝大教授工博 君島八郎	君島大測量学二冊	(大 二) (明 二九)
京都帝大教授工博 田辺朔郎	水力機械学二冊	(大 三一四)
名古屋高工教授 伊藤万太郎	土木応用力学	(大 元)
石丸文雄	森林土木工学全書 第一卷 右 同 第二卷	(大 二) (大 三)
京都帝大教授理博 水野敏之丞	電波と無線電信 無線電信電話論	(明 三七) (明 四四)

等がある。医学方面では次の諸著がある。

東京帝大教授工博	荒川 文六	電 子 論	(大 元)
東京帝大教授工博	鳳 秀 太 郎	原 子 論	(大 三)
工 博	吉川 亀 次 郎	荒川電気工学三冊	(明 三七)
東京帝大教授工博	田中芳雄 喜多源逸 安藤一雄 共著	交 流 理 論	(明 四五)
東京帝大教授工博	加藤 与 五 郎	変圧器及誘導電動機	(大 二)
九州帝大教授工博	織 田 經 二	工業電気化学三冊	(明 四一)
大蔵省鑑定官農学士	西村 寅 三	有機製造工業化学三冊	(大 二一三)
東京高工教授	大住 吾 八	最近化学工業試験法二冊	(明 四五)
東京府立織染学校教諭	横井寅雄	工業応用物理化学二冊	(大 元)
東京高工教授	中島 武 太 郎	化 学 工 業 大 要	(大 二)
		分 析 化 学 原 理	(大 二)
		肥 料 学	(明 三五)
		普通醬油釀造論	(明 四〇)
		力 織 機 構 学	(大 元)
		初 学 機 織 法	(大 元)
		実 用 機 織 法	(明 四二)
		実 用 色 染 学 二冊	(明 四〇—四三)

右の外特殊な専門的字彙として

編 著 者	書 名	出版年次
医 博緒方正清 京都帝大教授医博 鈴木文太郎	新撰助産学二冊 顯微鏡及鏡查術式	(明三九) (明四三)

編 著 者	書 名	出版年次
陸軍薬剤官相模嘉作 鈴木文太郎	解剖学名彙	(明三八)
理 学 士市村塘	新撰藥物名彙	(明四一)
工 博中村達太郎	独、羅、英、和動植物字彙	(明三六)
工 柴服中 島山井 田鹿秀三	日本建築字彙	(明三九)
工 永草君 山間島 弥八	英和工學辭典	(明四一)
工 士博 士博 士博		
文 文 文 博博博 中元井 島良上 力勇哲 藏次郎	英、独、仏、和、哲学字彙	(大元)

右のうち双壁とも称すべきは荒川文六工學博士の「荒川電氣工學三卷」と、三好學理學博士の英文併記の「日本

植物景觀」(十五集)である。前者が、とかく日本人の親しみ難しとした科学書を、当時としては破天荒にも平易と正確を期し得る言文一致体(いまの口語体)で記述する先蹤をつくり、只に電気工学の知識普及に異常の成功をおさめたのみならず、科学趣味の涵養にも貢献するところがあつた。東大元総長の茅誠司博士が荒川博士に自ら語つて、青年時代にこの本を読んで電気知識の開発をうくるに資したと云っているのは、湯川秀樹博士が、おなじく丸善から「相対性原律」その他多くの書物を出版している理論物理学の先覚の水野敏之丞博士から特別の眷顧を受けたというのと、東西学界好一对の佳話ではないか。

一時は「丸善の看板」とまで云われた俗称「荒川電気工学」の代表的批評として、ここには「工業雜誌」(明治三十七年第二一卷三〇〇号)に載つた一文を節略して掲げよう。

「冒頭省略」 近来工業書の出版は漸くにして増加し、多く著者の中には又内容と云ひ体裁と云ひ、大に整頓せる良書を見るに至れり、然れども専門書の免る可らざる弊として、或は学理の高尚に過ぎ、無味乾燥にして読者をして、難解晦渋、遂に巻を擲たしめ、或は余りに卑近にして、実地の瑣点に立ち亘りて、却て蕪雜不得要領ならしむる等、世間の需要を充分満足せしむるを見る甚だ尠なし、是れ工業書の世に出づる、尚浅くして、充分淘汰を経るの時期を有せざればならん。吾人は今回出版せられたる荒川電気工学を以て、必ずしも学理と実地とを同化せる唯一の模範良書なりと云はざるも少なくも、其中の一なりと云ふも敢て諛言に非るを信ず。

又本書の特色として賛成を表すべきは、其言文一致体を取られたるにあり、蓋し漢文直訳体が複雑にして且

精密なる數理的解説に適せざるは、吾人の一般に困難とする所なり、彼の二十年以前に、文部省が大に苦辛して出版せし諸種の工業書の如き、其語句の晦渋にして頗る難解なる、博識者と雖も其意を解し得ざる点少なからざるは其好例なりとす。

本書は工手学校程度の者に対して、其有するだけの數學的智識を以て、大部分を理會し得るものにして、実地を知るが爲に必要なだけの學理は、之を順序よく説明し、之を経とし実地を緯として組織し、読者をして勞を知らずして読了せしめ首肯するに到らしむるは、吾人の最も著者の手腕に敬服する所なり。

而して著者の言文一致は、此体に通有なる冗漫に陥らず、倦氣を催さしむる事なく、毫も頭腦を苦しめずして、すらすらと要領を會得し得るは、著者の用意の到れるに謝せざるべからざるなり。

吾人は屢電気専門外の高等技師工業者或は電氣の工手徒弟等より適當の教科書又は参考書なきやと問はれ、常に推薦すべき書なきに困せしが、今や本書の發行に依りて、此難は全く除去されたるを喜ぶ。本書は實に大學卒業程度の電氣科外の専門家、例へば土木造船業に属せる諸士が、己の専門に關係を及ぼす丈けの電氣の智識を得んとする者には、他に其比を見ざる良書にして、又電氣工事に従事する後進者には、無上の教師なり。

本書は全編を三に分ち、

上巻 直流に関する事 中巻 交流に関する事 下巻 電氣鐵道、原動機、發電所等に関する事

とせり、今出版せられたる其上巻のみに過ぎず、他は印刷準備中なりと云ふ、吾人は其の一刻も早く完成し、斯界を裨益せん事を希望す。

「工業雜誌」廿一卷三百号 工学士 町原駒評、明治三十七年」

三好博士の植物学の本は邦文の大著も丸善から出ているが、世界的名声を博したのは、和英文の *Atlas of Japanese Vegetation with Explanatory Text*, Edited by Prof. M. Miyoshi, D. Sc. である。欧米ともに盛んに批評した中で、特に注目すべきは「突然異変説」の主唱者ド・フリース教授の詳細をきわめた批評ののったことである。ド・フリースの説は大正の後半、ロシア革命の成功後あたりから、主としてマルキストによって我が国にも流布されたが、それに先立つ十余年、彼の方で、日本の植物にこれほど細かく注目しているのは、興味が深い。当時の「学鑑」（明治三十九年四月号）もこれを珍として、詳細に紹介しているから、それを全文のせておこう。

「ド・フリース教授は「日本植物景観」に就て詳細なる評論を述べられたり、今左に其要領を摘訳すべし。

該論文の劈頭に於ては先づ日本の文化が近世急速に進歩して、軍事上、學術上、工業上、美術上に於て欧米各国と頡頏するに至れることより説き起し、就中日本の美術の卓絶せる点を挙げ、又植物學上に於ても幾多の貢獻が日本人によりて成されたることを説けり、同教授は更らに日本国の自然界の美觀が同国の美術、工芸等に重要な關係を有するものなるを論じ、今「日本植物景観」に対しても該着眼点より世人の觀覽せんことを希望せり、是れよりして同氏は該景観発行の趣旨、写真版の形容、印刷の体裁并に解説等に涉りて詳細に紹介せる後、第一集及び第二集の内容に関して評論せり。

先づ第一集のウメに就て其の日本に於ける培養の状態、特性、園芸変種等を記し、該樹が上古支那より渡來せる後、栽培の結果として数多の変種を生じたるは猶彼のココヤシが一旦南米より東印度諸島に涉れる後に、

夥多の変種を形成するに至りたるが如くなるも、而かも猶ほウメの原産地たる支那に於て已に自ら変化したるものありたるならんと附述せり。

是れよりして同教授は嘗て其親しく観覧したる北米カリフォルニア州サンタ・ソーサの有名なるルーサー・バーバンク氏の果樹園に於ける夥多のスモ、ウメ、モ、等の園芸変種に説き及ぼし、同氏が雜種形成、接木、人為淘汰の諸術を利用して作れる無数の変種あること、日本産の種類も亦多く栽培せられ雜種形成の用に供せらるること、比較的乾燥地に適せる日本のウメの種類が彼国の湿性の種類を改良するの材料植物となり、以て彼のロス・エンジェル地方の如き水利の不便なる乾地に適應せる変種を形成せしむるを得たること等を附記したり。

次に第一集第二図版及び第三図版に表はせるヤマザクラ及びシダレザクラに移りて、サクラの種類が日本に於て優美なる花木として国民に賞観せらるることを詳説し、更らに進で第四図版なるハナシャウブに關し、該花が和蘭に於ても庭園に培養せられ「十二一重」の如き花部の四又は五となれるもの、如きものも亦同国の培養変種中に於て屢々発見せらるゝことを説き、之にして日本に於けるハナシャウブの培養の盛なること、花形、花大、花色等の著甚にして、変化の極めて多くなれるの点を挙げ、特形遺伝の有無及び人工淘汰の理に關して、ハインリッヘル氏の実験を引用し、此の如き研究の甚だ趣味あると共に、亦夥多の種類に於ける実験施行の容易ならざることを記せり。是れより第五、第六、第七、第八の各図版に載せたるコブシ、ヤツデ、小石川植物園内山水庭園及び雪中の孟宗竹に就て、各々其固有の点と景觀とを詳説し、先づ日本庭園内種植の樹木并に盆

栽の特徴に關しては、去る千九百四年の米國セント・ルイの万国博覽會内に於ける日本の庭園に就て觀察せる所を記し、日本園芸術の固有なること殊に盆栽の造り方の特異なることを論ぜり、次でヤツデ、コブシの類が日本に於ける園木として能く發生せるの状を説き、東京の氣候の適良なること、又之に反して和蘭に於てはヤツデの單に夏季の庭園植物たることを附述し、又マウソウチクに就ては其茎幹の巨大なること、殊に積雪の爲めに著しく屈曲せる状を記し、終りに小石川植物園内庭園の美觀を賞讃せり。是れより第二集に移り、先づ日光の廟祠の壯麗、山水の奇勝、杉並木の壯觀等を紹介し、更に進で該集の總說中に述べたる日光植物分布の概況を摘載し、中禪寺より湯本に至るまでのブナ（第十圖版）、カラマツ（第十二圖版）、ミヅナラ（第十一圖版）、タウヒ（第十四圖版）、モミ、ツガ（第十三圖版）、シ、ウド（第十五圖版）及び解説中に載せたる草木の種類に就て之を歐洲の植物区系に對照し、其類似の点を挙げ、又中禪寺湖畔に湯湖に「ブランクトン」の富饒なること、湯本温泉の硫黃「バクテリア」及び硫黃芝の形成をも附記し、米國エーローストン公園に於て見る所のものに比較せり。

本論文の末尾に於て、ド・フリース教授は結論して曰く、「日本植物景觀」第一、第二の兩集のみに就て予の推察する所によれば、日本の植物区系は從來一般に思考されたるが如く、歐洲植物系と絶對的に異なれるものにはあらず、勿論日本の南部にはソテツの如き熱帶植物を見るも、而かも其中央部にてはブナ、カバの如き寒地固有の樹木が恰も歐洲に於けるが如く山林の形成の主要なる部分となれるを知るべし、然れども是れ唯概論に過ぎずして、一々の植物景觀の如きは種々の方面に於て幾多の特徴を呈し、吾人に新奇の感覺を起さしむ

べし、三好氏の「日本植物景觀」は能く是等の特徴を現はすものなれば、予は植物学上に於ても又美術上に於ても亦該著の一般に歎で熟覽せらるべきを信ず。」

和蘭アムステルダム大学植物学教授ド・フリース (Prof. Hugo de Vries) 氏著「三好氏の日本植物景觀」(Miyoshi's Atlas von Japanische Pflanzen) 菊判十四頁

和蘭国理学雑誌「アルバム・デル・ナッール」(Album der Natuur) 一九〇六年二月発行掲載

ドイツではライブチッヒの「ボタニッシェ・ツァイツング」がストラスブルグ大学の植物学のドクトル・グラフ・ソルムスの批評をかがげた。

「序文に記せる如く、著者は本国固有の植物及び植物風景画を続々出版して、外国人にも日本植物の景觀を知らしめんとす、本集に収めたる八葉の写真画は培養及び半培養植物を示せるものにして、即ちウメ、ヤマザクラ、シダレザクラ、コブシ、ハナシャウブ、ヤツデ及雪中のモウソウチクなるが、之に尚ほ日本固有の山水庭園の景觀をも添へたり、凡べて是等の写真は鮮明美麗にして、充分に発行の目的を達せるものと云ふべし、望むらくは著者は今後本図説の出版を続行して、熱帯より氷海まで連絡せる島帝国の種々の部分に於ける植物景觀を比較的に示されんことを。」

その他ミュンヘン発行の「フロラ」誌は同市大学のゲーベル博士の批評、「ボタニッシェ・チェントラル・ブラット」(万国植物学界の機関誌)、「ミッタイルング・デア・ドイッチェン・デンドロロギッシェン・ゲゼルシャフト」(ドイツ樹木学界報告)も、無名氏の新刊紹介をし、アメリカではシカゴ発行の「ザ・ボタニカル・ガゼット」

がミシガン大学のニューカム教授の批評を、またオーストリヤの「オーステリッシエ・ガルテン・ツァイツング」(オーストリヤ園芸雑誌)はブラーグ大学のモーリシ教授の批評をかけたのが、「学鑑」の色刷広告面に訳して列記されている。

六 雑 貨 品

最後に大体、編年式記述によっている本文中に一々、その年代に記述する煩に堪えないで省いたものは、次に一括して掲げておこう。

万年筆で明治三十六年以降に輸入されたのは次の通りである。

輸 入 年	輸 出 国	品 名
明治三十六年	不 明	ドラゴン万年筆
明治三十六年	イギリス	ドド万年筆
明治三十六年	アメリカ	スベンセリアン万年筆
明治三十八年	不 明	グラビチー万年筆
明治四十年	イギリス	オノト万年筆
明治四十一年	イギリス	クラフト万年筆
明治四十二年	イギリス	ゼニス万年筆
明治四十四年	イギリス	オリオン万年筆

右のうち最もひろく愛用せられて、今もその名が人の記憶にとどまっているのはオノトとオリオンで、これは現品をまでもっている人がさがし出せるであろう。ことにオノトは日本の輸入万年筆中、第一の需要があったと云われている。

日露戦後より大正初年にかけて輸入された文具類では、独逸のゾネッケン会社製のものが最も多かった。その種類は次の如くである。

レターファイル、ドキュメントファイル、グラムプ書類整理挾、ルーズリーフ式書類整理挾、ルーズリーフ式手帳、書類整理挾用穴明器、備忘録、卓上カレンダー、葉書挾、書籍台、インキスタンド、プロッター、クイールペン、図引用ペン、クリップ、切手類貼付用採湿器、文字形付版

殊に四十年頃より帳簿に漸次カード式が採用されるに及び、ルーズリーフ式書類整理挾はその需要が著しく増加した。ゾネッケン会社に特別注文して、丸善の名を入れて作らせた丸善センチューペンを売り出したのは、大正に入ってからである。ペン先にはゾネッケン製の外に、英国のブランドー製のJペン、Gペン、レビューペン、英国のヒンクス製のGペン、英国のペリー製のGペン、銀行ペン、米国スペンセリアン製の一号ペン、カウンティングハウスペン、コンマーシャルペン、スクールペン、スタンダードペン、フワルコンペン、少し遅れて英国のミッチェル製のJペン、Gペン、銀行ペン、製図用ペン等が専ら輸入された。インキには丸善製の外に、書記用として英国ステフェン製インキ、万年筆用としてウォターマンの外に米国カーター製インキ、製図用インキとして英国ステューバー製の防水図引用インキ、青写真修正用インキ等が輸入され、又インキ消としてカーター製インキ消液、ペ

リー製インキ消が売られた。

鉛筆に於ては英国ハードマース製のコイノア印製図用鉛筆、コイノア印コピー用鉛筆、色鉛筆、繰出鉛筆、独国A・Wファーパー製の製図用鉛筆、記帳用鉛筆、及同社製のカステル印コピー用鉛筆、カステル印色鉛筆、カステル印繰出鉛筆、米国リードペンシル社製のデイケン鉛筆、独国ゲーハ印軍用色鉛筆等があった。

鉛筆削にはA・Wファーパー製のもの及米国製のUS式自動鉛筆削が大正初年に入り、消ゴムには米国コレッシュ製、A・Wファーパー製のものが販売されていた。

次に計算尺に就て見るに、横田工学博士が英国滞在中に考案し英国デビズ会社に製作せしめた横田式計算尺、A・Wファーパー会社製の計算尺、コレッシュ会社製のミゼット形計算尺、独国ウイヒマン会社の時計形計算尺、米国サイエンティフィックマテリアル会社製の化学者用計算尺等があり、製図用器械としてはウイヒマン会社製のものが輸入されていた。又大正初年頃よりは丸善製の製図用器械も販売されていた。

事務用器械としてはタイプライター、ナンバーリングマシン、紙綴器、手形用数字打抜機等が発売された。

この頃新たに輸入されたタイプライターの中主なるものを挙げれば、明治三十七年にデンスモアタイプライター、フランクリントタイプライター、同四十年にオリバータイプライターなどである。

ナンバーリングマシンとしては明治三十九年にフォレートの指動回転番号機、同四十四年に米国製ロボートの指動回転番号機、同自動回転番号機が輸入された。

紙綴器に於ては明治三十六年に米国製ホットキスNo.1自動紙綴器、同三十九年に独国製ウエリントンNo.2

自動紙綴器、同四十五年に独国製クリップレス紙綴器、これに類するものとして、明治四十五年に米国製鳩目パンチが輸入され、手形などに数字をうちぬくチェックプロテクターはアメリカ製エスビー式数字打ちぬき機が明治四十年に入っている。

七 重役陣の移動

編年体に記述し難い条目に重役陣の移動がある。これは又明治から大正へもまたがるので、鳥瞰的に一括して略述しておこう。

明治三十四年創業の人、早矢仕有的が死去したので取締役は小柳津要人、金沢井吉、中村重久の三人となったが、しばらくその補充をせず三十六年二月に至って改選を行い、右三人の外に新に山崎信興および斎藤定四郎の兩人が就任した。

山崎信興は入社このかた主として唐物店にあって外国商品の輸入事務に携っていた。斎藤定四郎は明治三十三年七月三日金沢末吉の後をついで大阪支店支配人に任ぜられ、支配人の位置のままで取締役に就任した。

ついで四十一年一月二十四日金沢井吉は病気のため取締役を辞任し、井吉の弟金沢末吉が代って取締役に就任した。末吉は明治三十三年七月大阪支店支配人より東京本店に転じ、三十六年十一月書籍部出版主任兼地方販売課主任に任ぜられ、専ら書籍部の仕事を分担していた。

かくて小柳津、中村、山崎、斎藤、金沢（井吉―末吉）の五人が、取締役として日露戦争の前からかけて第一次

ヨーロッパ大戦たけなわなる大正五年一月二十四日までその任に當った。

右の中小柳津要人は明治三十三年一月松下鉄三郎死去の後専務取締役となり、爾来十五年の久しきに亘って丸善を統轄し、その間丸善はその成績を年毎にあげ、何の不安もない安定状態となったこと、これはすでに記述しておいた通りだ。大正五年一月二十四日の定時株主總會に於て小柳津要人は勇退を表明したため、その辞任を認め、更に会社に相談役を設置することを決し、小柳津要人を相談役に推した。小柳津要人の専務取締役辞任の後、中村重久が代つて専務取締役に就任し、又取締役欠員のため新に松下領三が取締役に就任した。

小柳津要人はその後約五年余り相談役として丸善の發展のために尽したが、大正十一年六月二十一日を以て歿した。

中村重久はその任にあること僅かに三年に滿たずして、小柳津に先んじ大正七年十二月二十日死去した。よつて大正八年一月二十四日取締役山崎信興が社長に、取締役松下領三が専務に、新に荒川実が取締役に就任した。

荒川実は明治十一年一月兵庫県出石町に生れ、第一高等中学校中途退學の後、明治三十年九月二十日に入社し、主として洋書並に外国雜誌の仕入及店頭販売に従事し、四十一年一月副支配人に任じ、書籍部長兼仕入課及雜誌課長を命ぜられ、その間大英百科全書第九版の販売及外国雜誌の顧客への直送等に大きな功績があった。

由来社長は必ずしも必置のものとなせず、明治二十六年の定款には、取締役はその互選によつて専務取締役又は社長一名を選定すべしとあり、又三十六年以來の定款には、取締役はその互選を以て社長及専務取締役各一名を選定すべきであるが、都合によつて社長は選定しないことがある旨の但書が附されている。そのため二十六年以後社長

は全く置かれず、専務取締役によって統轄されていたのであるが、会社の発展と共に陣容を整備拡大する必要が起つてきて、社長専務取締役の二者が並存せられることとなり、山崎信興が丸善株式会社となつてから最初の社長に就任した。

監査役の任期は明治三十二年の定款改正の際一年と改められたのであるが、その後四十五年一月二十四日の定時株主総会に於て再び二年に復せられた。監査役には三十五年十二月以来鈴木仁一郎、和田治衛の兩人が就任して居たが、三十九年一月二十四日の改選期に当り、和田治衛が辞任して新に金原巳三郎が就任した。金原巳三郎は金原明善の養孫であり、ここに至つて監査役は金原系の人によつて占められることとなった。而して鈴木仁一郎は昭和四年八月二十四日迄、又金原巳三郎は昭和十一年二月二十四日取締役就任迄共に長くその任にあった。